

# 四條金吾釈迦仏供養事

建治二年七月一五日 五五歳

御日記の中に釈迦仏の木像一体等云云。

開眼かいげんの事、普賢ふげんぎょう經に云はく「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目げんもくなり」等云云。又云はく「此の方等經は是諸仏の眼なり諸仏是に因よつて五眼げんを具することを得たまへり」云云。此の經の中に得具五眼げんとは一には肉眼、二には天眼、三には慧眼、四には法眼、五には仏眼なり。此の五眼をば法華經たもを持つ者は自然じねんに相具あいぐし候。譬へば王位につく人は自然に国のしたかうごとし。大海の主となる者の自然に魚を得るに似たり。華嚴・阿含・方等・般若・大日經等には五眼の名はありといへども其の義なし。今の法華經には名もあり、義も備はりて候。設たひ名はなけれども必ず其の義あり。

三身の事、普賢經に云はく「仏三種の身は方等より生ず。是の大法印は涅槃海を印す。此くの如き海中より能く三種の仏の清淨しょうじょうの身を生ず。此の三種の身は人天の福田にして応供おうぐの中の最なり」云云。三身とは一には法身如来、二には報身如来、三には応身如来なり、此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす。譬へば月の体は法身、月の光は報身、月の影は応身おうじんにたと。一の月に三のことわりあり、一仏に三身の徳まします。この五眼三身の法門は法華經より外には全く候はず。故に天台大師の云はく「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝へず」云云。此の釈の中に於諸教中とかゝれて候は、華嚴・方等・般若のみならず、法華經より外の一切經なり。秘ひ之不伝しふでんとかゝれて候は、法華經の寿量品より外の一切經には教主釈尊秘して説き給はずとなり。

されば画像えぞう・木像の仏の開眼供養は法華經・天台宗にかざるべし。其の上一念三千の法門と申すは三種の世間よりをこれり。三種の世間と申すは一には衆生世間ごおん、二には五陰世間しばら、三には国土世間なり。前の二は且く之を置く、第三の国土世間と申すは草木世間なり。草木世間と申すは五色絵具の匂しほのぐは草木なり。画像これより起こる。木と申すは木像是より出来ず。此の画木えもくに魂魄こんぼくと申す神たましいを入るゝ事は法華經の力なり。天台大師のさとりなり。此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ、画木にて申せば草木成仏と申すなり。止観みょうじょうの明静なる前代にいまだきかずとかゝれて候と、無情わく仏性きょうしん惑耳たど驚心等とのべられて候は是なり。此の法門は前代になき上、後代にも又あるべからず。設たひ出来せば此の法門を偷盜ちゆうとうせるなるべし。然るに天台以後二百余年の後、善無畏・金剛智・不空等、大日經に真言宗と申す宗をかまへて、仏説の大日經等にはなかりしを、法華經・天台の釈を盗み入れて真言宗の肝心とし、しかも事を天竺によせて漢土・日本の末学おうわくを誑惑しんぶくせしかば、皆人此の事を知らず、一同に信伏して今に五百余年なり。然る間真言宗已前の木面の像は靈驗殊勝なり。真言已後の寺塔りしょうは利生くわうすし。事多き故に委しるしく注せず。

此の仏こそ生身しょうじんの仏にておはしまし候へ。優填うでん大王の木像ようけんと影頭王うづつじょうの木像と一分もたがうべからず。梵帝・日月・四天等必定して影の身に随ふが如く貴辺をばまぼらせ

給ふべし<sup>是</sup>。

御日記に云はく、毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間、大日天子に仕へさせ給ふ事、大日天子と申すは宮殿<sup>しっぽう</sup>七宝なり。其の大きさは八百十六里五十一由旬<sup>おお ゆじゆん</sup>なり。其の中に大日天子居し給ふ。勝・無勝と申して二人の<sup>きさき</sup>后あり。左右には七曜・九曜つらなり、前には摩利支天女<sup>まりし</sup>まします。七宝の車を八匹の駿馬<sup>しゆんめ</sup>にかけて、四天下を一日一夜にめぐり、四州の衆の眼目と成り給ふ。他の仏・菩薩・天子等は利生のいみじくまします事、耳にこれをきくとも愚眼<sup>ぐげん</sup>に未だ見えず。是は疑ふべきにあらず、眼前の利生なり。教主釈尊にましまさずば争<sup>いか</sup>でか是くの如くあらたなる事候べき。一乗の妙経の力にあらずんば争でか眼前の奇異をば現<sup>あら</sup>ず可き。不思議に思ひ候。争でか此の天の御恩をば報<sup>ら</sup>ずべきともとめ候に、仏法以前の人々も心ある人は、皆或は礼拝<sup>らいはい</sup>をまいらせ、或は供養を申し、皆しるしあり。又逆をなす人は皆ばつあり。今内典を以てかんがへて候に、金光明経に云はく「日天子及以月天子是の経を聞くが故に精気充実す」等云云。最勝王経に云はく「此の経王の力に由つて流暉<sup>るき</sup>四天下を遶<sup>めぐ</sup>る」等云云。当に知るべし、日月天の四天下をめぐり給ふは仏法の力なり。彼の金光明経・最勝王経は法華経の方便なり。勝劣を論ずれば乳と醍醐と、金と宝珠との如し。劣なる経を食しましめて尚四天下をめぐり給ふ。何に況んや法華経の醍醐の甘味を嘗めさせ給はんをや。故に法華経の序品には普香天子とつらなりまします。法師品には阿耨多羅三藐三菩提と記せられさせ給ふ、火持如来是なり。其上慈父よりあひつたはりて二代、我が身となりてとしひさし。争でかすてさせたまひ候べき。其上日蓮も又此の天を恃<sup>たの</sup>みたまつり、日本国にたてあひて数年なり。既に日蓮かちぬべき心地す。利生のあらたなる事外にもとむべきにあらず。

是より外に御日記たうとき申す計りなけれども紙上に<sup>つ</sup>尽くし難し。なによりも日蓮が心に<sup>貴</sup>たつとき事候。父母御孝養の事、度々の御文に候上に、今日の御文<sup>涙</sup>なんだ更にとどまらず。我が父母地獄にやをはすらんとなげかせ給ふ事のあわれさよ。仏の弟子の御中に目撃尊者と申しけるは、父をば<sup>吉</sup>きつせん師子と申し、母をば青提女と申しけるが、餓鬼道に<sup>隨</sup>をちさせ給ひけるを、凡夫にてをはしける時はしらせ給はざりければ、なげきもなかりける程に、仏の御弟子とならせ給ひて後、阿羅漢となりて天眼をもて御らんありければ、餓鬼道におはしけり。是を御らんありて飲食をまいらせしかば、炎となりていよいよ苦をましさせまいらせ給ひしかば、いそぎはしりかへり、仏に此の由を申させ給ひしぞかし。爾の時の御心<sup>み</sup>をおもひやらせ給へ。今貴辺は凡夫なり。肉眼なれば御らんなけれども、もしもさもあらばとなげかせ給ふ。こは孝養の一分なり。梵天・帝釈・日月・四天も定めてあはれとをばさんか。華嚴経に云はく「恩を知らざる者は多く横死に遭<sup>あ</sup>ふ」等云云。観仏相海経に云はく「是阿鼻の因なり」等云云。今既に孝養の志あつし。定めて天も納受<sup>のうじゆ</sup>あらんか<sup>是</sup>

御消息の中に申しあはさせ給ふ事、くはしく事の心を案ずるに、あるべからぬ事な

り。日蓮をば日本国の人あだむ。是はひとへにさがみどのゝあだませ給ふにて候。ゆへなき御政りごとなれども、いまだ此の事にあはざりし時より、かゝる事あるべしと知りしかば、今更いかなる事ありとも、人をあだむ心あるべからずとをもひ候へば、此の心のいのりとなりて候やらん。そこばくのなんをのがれて候。いまは事なきやうになりて候。日蓮がさどの国にてもかつえしなず、又これまで山中にして法華経をよみまいらせ候は、たれがたすけぞ。ひとへにとのゝ御たすけなり。又殿の御たすけはなにゆへぞとたづぬれば、入道殿の御故ぞかし。あらわにはしろしめさねども、定めて御いのりともなるらん。かうあるならば、かへりて又とのゝ御いのりとなるべし。父母の孝養も又彼人の御恩ぞかし。かゝる人の御内を如何なる事有ればとて、すてさせ給ふべきや。かれより度々すてられんずらんはいかゞすべき。又いかなる命になる事なりとも、すてまいらせ給ふべからず。上にひきぬる経文に不知恩の者は横死有り見えぬ。孝養の者は又横死有るべからず。鶉と申す鳥の食する鉄はとくれども、腹の中の子はとけず。石を食する魚あり、又腹の中の子はしなず。梅檀の木は火に焼けず、浄居の火は水に消へず。仏の御身をば三十二人の力士火をつけしかどもやけず。仏の御身よりいでし火は、三界の竜神雨をふらして消しゝかどもきえず。殿は日蓮が功德をたすけたる人なり。悪人にやぶらるゝ事かたし。もしやの事あらば、先生に法華経の行者をあだみたりけるが今生にむくふなるべし。此の事は如何なる山中海上にてものがれがたし。不軽菩薩の杖木の責めも、目犍尊者の竹杖に殺されしも是なり、なにしにか歎かせ給ふべき。

但し横難をば忍ぶにはしかじと見へて候。此の文御覧ありて後は、けっして百日が間をぼろげならでは、どうれひならびに他人と我が宅ならで夜中の御さかもりりあるべからず。主のめさん時はひるならばいそぎまいらせ給ふべし。夜ならば三度までは頓病の由申させ給ひて、三度にすぎば下人又他人をかたらひて、つじをみせなんどして御出仕あるべし。かうつゝませ給はんほどに、むこ人もよせなんどし候わば、人の心又さきにひきかへ候べし。かたきを打つ心とゝまるべし。申させ給ふ事は御あやまちありとも、左右なく御内を出でさせ給ふべからず。まして、なからんにはなにとも人申せ、くるしからず、をもひのまゝに入道にもなりてをはせば、さきざきならばくるしからず。又身にも心にもあはぬ事あまた出来せば、なかなか悪縁度々来るべし。このごろは女は尼になりて人をはかり、男は入道になりて大悪をつくるなり。ゆめゆめあるべからぬ事なり。身に病なくともやいとを一二箇所やいて病の由あるべし。さわぐ事ありとも、しばらく人をもつて見せをほせさせ給へ。

事々くはしくはかきつくしがたし。此の故に法門もかき候はず。御経の事はすゞしくなり候ひて、かいてまいらせ候はん。恐々謹言。

建治二年丙子七月十五日

日蓮花押

四条金吾殿御返事